☆年間第１３主日（６月２８日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（列王記下　４章８～11、14～16a 節）

　ある日、エリシャはシュネムに行った。そこに一人の裕福な婦人がいて、彼を引き止め、食事を勧めた。以来彼はそこを通るたびに、立ち寄って食事をするようになった。
彼女は夫に言った。
「いつもわたしたちのところにおいでになるあの方は、聖なる神の人であることが分かりました。あの方のために階上に壁で囲った小さな部屋を造り、寝台と机と椅子と燭台を備えましょう。おいでのときはそこに入っていただけます。」
　ある日、エリシャはそこに来て、その階上の部屋に入って横になり、従者ゲハジに、「あのシュネムの婦人を呼びなさい」と命じた。ゲハジが呼ぶと、彼女は彼の前に来て立った。エリシャは、「彼女のために何をすればよいのだろうか」と言うので、ゲハジは、「彼女には子供がなく、夫は年を取っています」と答えた。そこでエリシャは彼女を呼ぶように命じた。ゲハジが呼びに行ったので、彼女は来て入り口に立った。エリシャは、「来年の今ごろ、あなたは男の子を抱いている」と告げた。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 ６章３～4、８～11 節）

　それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。
　わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に

対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

福音朗読　（マタイよる福音書　１０章 ３７～４２節）

そのとき、イエスは使徒たちに言われた。
「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」
「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。預言者を預言者として受け入れる人は、預言者と同じ報いを受け、正しい者を正しい者として受け入れる人は、正しい者と同じ報いを受ける。
はっきり言っておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

いよいよ教会でも毎日曜日のミサが執り行われることになりました。人数制限もあって9時と10時30分の二回のミサを行うことになりました。
はじめは人数が偏るのではないかと心配しましたが、両方とも40人前後で収まりましたのでほっとしています。東京都ではまた感染者が増えてきています。ワクチンとか薬に頼ることはできませんので、マスクの着用、手指洗浄、うがい、3密を避けるなど感染予防を徹底していきましょう。
さて28日は「聖ペトロ使徒座への献金」の日になっています。この献金は「キリストの代理者、教会の最高牧者である教皇は、祈りと具体的な援助を通して全世界の人々にいつも寄り添っているのです。この教皇に心を合わせて、私たちも世界中の苦しんでいる人々のために祈りと献金を捧げます」と案内されています。よろしくご協力ください。

第一朗読　（列王記下　４章８～11、14～16a 節）

ここでは神の人エリシャを家に泊めてもてなしたシュネムの女性のことが述べられています。彼女は何か見返りを求めることなく神の人エリシャを迎えます。そのことが結果的に彼女に神の恵みが降ることになったというエピソードです。このエピソードは今日の福音のための準備となっています。

第二朗読（使徒パウロのローマの教会への手紙 ６章３～4、8～11 節）

パウロはここで私たちが受けた洗礼の偉大な結果について述べています。私たちはイエスに結ばれるため、イエスとともに生きるために洗礼を受けたのですが、それはキリストとともに葬られその死にあずかるものとなり、キリストの栄光ある復活に結ばれることを意味しているのです。キリストと共に死ぬとはどういうことでしょうか。それは自分に死ぬということ、神に生きるということ、神のみ旨を探して生きるということです。私は自分の計画ではなく、神が私に望んでおられることを探しそれを行うことなのです。それは何となく自分を失うこと、受け身的に生きることのように考えられがちですが、そうではありません。憐れみ深く、慈しみの神が私たちに無駄な生き方、自分でない生き方を望まれるはずがありません。私たちに価値のある生き方、自分にとっての最高の生き方を望み,そのために助けてくださる方です。十字架上のイエスは御父が自分に最高の生き方をさせてくださったことを信じ「み手に委ねます」と言って息を引き取られたのです。そしてそのイエスは栄光に輝く復活を成し遂げ、私たち人類の長子となられ、私たちを招いておられるのです。

福音朗読　（マタイよる福音書　１０章 ３７～４２節）

今日の福音は二つのテーマが語られています。「自分の命を得ようとするものはそれを失い、私（イエス）のために命を失うものは、かえってそれを得るのである」。イエス、すなわち神の国を優先することです。これは私たちに神への奉仕を義務付けているように思われますが、実はそうでは

ありません。私たちが神様のほうを向くことによって私たちに与えられている力が最高の結果を生むようにしてくださるということです。内向きになりやすい私たちが心を広げることを望んでおられるのです。それはもう一つのテーマとも関係があります。「私よりも父母を愛するものは・・」という言葉ですが、「父母を愛するなと」は言われていません。十戒にも規定されていることですから。そうではなく、神を愛するためにはこの私の父母をどのように愛することが最もふさわしいことなのかを考え、行うことなのだということだと思います。第一朗読で読まれたエピソードでは、まず神の人エリシャをふさわしくもてなしたことが神の恵みを将来させたのだということです。神様は私たちにむやみに犠牲を強いられはしません。そう感じることがあってもその裏その向こうには神様によってより豊かな恵み、幸いが用意されているのです。今の時代、コロナの時代は私たちの信仰へのチャレンジだと思います。このような時代にあって、私たちは何を優先するのかが問われているのです。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光